

全国の自治体に届け出られていたのは537施設(2015年6月末時点)で、1万5600人が入居しています。このうち約9割が生活保護受給者で、65歳以上の高齢者が約4割です。本来は一時的に住む「シェルター」の役割ですが、実際には約6割が一年以上住み続けています。ほかに届

悪質な宿泊所のイメージ



- ・狭いところにたくさんの生活保護費などを押し込める
- ・火事などへの対策がない
- ・汚い

# 孤独な心の居場所になる

死にたい思いを抱える人が安心して相談できる場所や相手として、寺や僧侶をもっと活用できないか。欧米やアジアなど国内外の仏教関係者が集まった「仏教と自死に関する国際シンポジウム」。孝道教師・国際仏教交流センターや浄土真宗本願寺派総合研究所などが主催、昨年11月に関東と関西で5日間にわたり自殺予防と遺族支援の実践例を共有、意見を交換した。

初日は、日本の仏教教団や宗派を超えた僧侶らによる取り組みが主に紹介された。苦悩を抱える人々のための相談窓口、自殺者の供養や追悼法要、遺族ケアなどで、それぞれの特色を生かしながら活動を展開している。共通するのは、相手を傷つけずに気持ちを受け止めて対応することに細心の注意を払う点。曹洞宗総合研究所センター専任研究員の宇野全智さんは、か

かりつけ医師のような「かかりつけ寺院」を提案、寺院を自殺対策の最前線として捉え直すように問題提起した。

浄土宗僧侶で宗教学者の小川有閑さんは、超宗派で構成する「自死・自殺に向き合う僧侶の会」のメンバー。会の特徴は、



「仏教と自死に関する国際シンポジウム」で、自殺対策の取り組みを報告する小川有閑さん

孤立する相談者に直筆で書く手紙だ。直筆にぬくもりを感じ、お守りのように持ち歩く相談者もある。10年間で手紙は8千通を超えた。手紙では死にたいという相手の気持ちを否定しない。「引っぱり上げるのではなく、

「受験に勝つぞ」工夫凝らす

受験シーズンに向けた菓子が登場している。合格を祈願し「勝つ」など商品名を語呂合わせしたり、受験生にメッセージが書き込める欄を設けるなど工夫している。

日清シスコ(東京)の焼き菓子「ココ勝ツツサブレ」は、同社の「ココナツツサブレ」の期間限定商品。合格を勝ち取ってもらいたいという思いを込めた。包装は紅白を基調とし、小分け袋には「大大吉」といった応援の言葉のほか、自由に書き込める欄もある。5枚入りの小袋が四つ入って希望小売価格は162円。

## 僧侶が自殺防止と遺族支援

孤独する相談者に直筆で書く手紙だ。直筆にぬくもりを感じ、お守りのように持ち歩く相談者もある。10年間で手紙は8千通を超えた。手紙では死にたいという相手の気持ちを否定しない。「引っぱり上げるのではなく、



自殺予防に取り組む仏教関係者は遺族支援にも力を入れる。ただ、社会的偏見にさらされがちな遺族と接する中、僧侶が追

僧侶による自殺対策 自殺問題に積極的に関わる僧侶は10年ほど前から増え、手紙や電話での相談を含めたさまざまな活動を行っている。遺族の集いや追悼法要も各地で営まれるようになった。「自

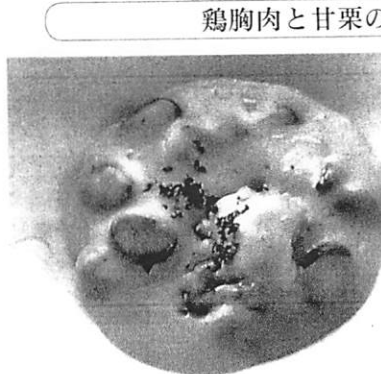
い打ちを掛けている例も知る。「自殺したら成仏しない」。教義にない言葉を投げ掛けられ、傷つく人々。「自死は一つの死の在り方。成仏しないということはない」。サポート活動に携わる僧侶は言葉に力を込める。



京都自死・自殺相談センター代表の竹本了悟さん

で、対策は急務だろう。こうした状況の中、工夫を凝らした活動で注目を集めるのが、国際シンポに深く関わったNPO法人「京都自死・自殺相談センター Sototo」。事務局は浄土真宗本願寺派総合研究所にあるが、相談活動に宗教色はない。

16年の相談は約4千件。電話がメインだが、メール相談が増加し続けている。「これからはメールだと思いが、『死にたい』気持ちを持った人の心の居場所になる多様な場を模索したい」と話すのは、代表の本願寺派僧侶竹本了悟さん。リアルな場所



鶏胸肉と甘栗の